

現在主義と持続の理論

鈴木生郎 (Ikuro Suzuki)

日本大学

本提題の主題は、現在主義と持続の理論の関係である。現在主義は、現在に位置するもののみの存在を認める時間論上の立場であり、現在だけでなく過去や未来に位置するあらゆるものの存在を認める永久主義と対立する。また、持続の理論は、物質的対象が時間のうちでどのように持続しているのかを説明する理論であり、一般には、四次元主義（延続説）と三次元主義（耐続説）に区別される。そして、現在主義と永久主義のそれぞれが、四次元主義と三次元主義のそれぞれと整合的なのかという問題は、現代の形而上学において重要であり続けてきたものである。

この点について、私が以前鈴木(2017)において達成したことは限定的である。そこでの私の主眼は、あくまでも永久主義を採用した上で、四次元主義と三次元主義の区別を明確化することであり（結果としてややこしい定義ができあがった）、時間論との整合性は主眼ではなかった。したがって、現在主義は四次元主義と整合しない見込みは高いと指摘したものの、現在主義における持続の理論がどのようなものになるのかは論じていない。実際その時点では、現在主義と三次元主義の組み合わせについては明確な見通しをもてなかったというのが正直なところである。

しかしこの点について、近年ジョナサン・タラント (Tallant (2018)) は、現在主義は四次元主義のみならず三次元主義とも整合しないという議論を与えている。この議論については、すでにサム・バロンやハロルド・ヌーナンが答えており (Baron (2020); Noonan (2020))、その応答には一定の説得力があると思われる。しかし、こうした議論を踏まえて考えるにつれ、現在主義と持続の理論の組み合わせには、タラントが指摘するものとは少し異なる問題があるのではないかと考えるようになった。

私は本提題で、その問題を示すために以下のように論じる。現在、永久主義を前提とした、もっとも標準的な四次元主義と三次元主義の定義は、「時空的位置付けに基づく定義」である（鈴木(2017)の定義もこの定義を本質的に含む）。私はまず、この定義が三つの美点を持つことを確認する。すなわち、(1)三次元主義にとって本質的な「余すところなく現れる」という概念を明確化していること、(2)三次元主義と四次元主義の対立を実質的なものにすることに貢献していること、(3)三次元主義と四次元主義が、物質的対象が持続するあり方を説明する立場であることを適切に捉えていることの三点である。

しかし、こうした定義は、四次元時空の存在を前提に与えられており、現在主義においてはそのままでは利用できない。そこで私は次に、この点に現在主義がどう対処できるかを、代用主義的現在主義と、それ以外の比較的標準的な現在主義に分けて検討する。そし

て私は、(a)代用主義的現在主義は、四次元主義と三次元主義が持続を説明する理論であることを捉えられないこと、(b)それ以外の標準的現在主義は、三次元主義の理解を不明瞭にし、両者の対立を実質的なものと捉えること難しくすることを示す。これらの点が表しているように思われるのは、現在主義において持続の理論を構築することや、その対立を理解することには、まだよくわからない点が多く残されているということである。

Baron, S. 2020. “How to Endure Presentism.” *Inquiry* 62(6): 659-673.

Noonan, H. 2020. “Presentism, Endurance and Object Dependence.” *Inquiry* 62(9-10): 1115-1122.

Tallant, J. 2018. “Presentism, Persistence and Trans-Temporal Dependence.” *Philosophical Studies* 175: 2209–2220.

鈴木生郎 2017 「四次元主義と三次元主義は何についての対立なのか」、『科学基礎論研究』44(1-2): 15-33.